様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：８２６１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０４４８３

研究課題名（和文）心的外傷後ストレス障害の青少年を対象にした認知処理療法のマニュアル開発と効果検証

研究課題名（英文）Development and validation of a manual of cognitive processing therapy for adolescents with post-traumatic stress disorder

研究代表者
片柳　章子（Katayanagi, Akiko）

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・客員研究員

研究者番号：８０７９２４０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：認知処理療法（Cognitive Processing Therapy ; CPT）は、成人の心的外傷後ストレス障害（PTSD）治療に対してエビデンスの示された認知行動療法である。しかし、青少年に特化したエビデンスに基づくPTSD治療は申請者らの知る限り存在しなかった。そこで本研究では、PTSDやトラウマ関連症状を有する青少年のケアや治療の向上を目的として、情動コントロールや安全のための対処スキルを含んだ青少年用CPTのマニュアルを開発した。本人用と養育者用のワークブックを作成し、イラストや漫画を多用することで青少年や養育者が理解しやすいよう体裁の工夫を施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、心的外傷後ストレス障害（PTSD）やトラウマ関連症状を有する青少年のケアや治療の向上を目標として、国際的な診療ガイドラインで第一治療選択として推奨されている認知処理療法（CPT）の青少年版を開発した。その過程でCPTの開発者であるデューク大学教授Patricia Resick博士や日本のトラウマ専門家等による会議を重ね、治療プログラムを細部まで整備し、本人用と養育者用のワークブックを作成した。このワークブックは、PTSDの治療だけでなく、情動コントロールや安全のための対処スキル等を含んでおり、PTSDやトラウマ関連症状を有する青少年のケアに広く活用されることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：Cognitive processing therapy (CPT) is a method of cognitive-behavioral therapy with evidence for the treatment of post-traumatic stress disorder (PTSD) in adults. However, to knowledge of the applicants, evidence-based PTSD treatments specific to adolescents did not exist. Therefore, in the present study, with the aim of improving the care and treatment of adolescents with PTSD and trauma-related symptoms, we developed a manual for CPT for Adolescents and Young Adults with Post-traumatic stress symptoms (CAYAP), which includes coping skills for emotional control and safety. Workbooks for the subjects and their caregivers were created with many illustrations and comics used in order to facilitate the understanding of adolescents and their caregivers.

研究分野：臨床心理学

キーワード：青少年　心的外傷後ストレス障害　心的外傷後ストレス症状　認知処理療法　認知行動療法　トラウマストレス　心理療法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、本邦では自然災害や性犯罪、ドメスティック・バイオレンス、虐待、いじめ、体罰等、青少年が生命の危機や心身に重傷を負うようなトラウマティックな出来事に遭遇する機会は稀ではないにもかかわらず、被災・被害後、心的外傷後ストレス障害（Post Traumatic Stress Disorder; 以下、PTSD）や心的外傷後ストレス症状（Post Traumatic Stress Syndrome; 以下、PTSS）を有した青少年への専門的なケアが不足しており、深刻な問題となっていた。例えば、いじめや体罰が背景にあると考えられる自殺事案が次々と発生し、文部科学省は、全国の小学校、中学校、高等学校へ定期的ないじめアンケート調査を依頼し、また、体罰禁止の徹底を図る趣旨を打ち出すなど、対人関係に起因するトラウマ体験を契機に不登校や引きこもり等、社会不適応となる事態が問題視されていた[1)]。

法務省の犯罪統計における強姦・強制わいせつ被害者の年齢層別構成比を概観すると、最も被害率の高い年齢は、17 年間連続して 13～19 歳の青少年だった[2)]。2014 年度中の性犯罪認知件数は、13～19 歳では、強姦 429 件(34.3%)、強制わいせつ 2,625 件(35.5%)と共に全体の 3.5 割が青少年を対象とした被害だった[2)]。さらに、性犯罪被害者、特に強姦の被害においては、PTSD の有病率が高いことが報告されており[3)]、PTSD に罹患した青少年への専門的な治療の開発が社会的に求められていた。

国際的な診療ガイドラインにおける PTSD 治療の第一選択は、トラウマに焦点を当てた認知行動療法（Cognitive Behavior Therapy; 以下、CBT）であるが[4)]、なかでも認知処理療法（Cognitive Processing Therapy; 以下、CPT）の効果サイズは Hedges'g = 1.69 と非常に高く、PTSD の治療選択薬として推奨される選択的セロトニン再取込阻害薬（SSRI）の効果サイズ（g = 0.48）を遥かに凌駕していた[5)]。しかし、被害率の高い青少年の PTSD に特化した治療に関する日本での研究は、申請者らの知る限り存在しなかった。

申請者らの研究グループは、CPT の前後比較試験を行い、有効性について期待できる成果が得られたため[6)]、ランダム化比較試験に着手していた（臨床試験登録：UMIN000021670）。その中で、青年期の被験者が治療中に別の性犯罪被害に遭う事態が発生したり、また、青少年期に外傷的な出来事を体験し、被害当時、PTSD に特化した治療を受けることができず、結果、症状が重篤化し、さらに自分を非難する考えや極端な思い込み等の認知の変容が著しい事例を複数経験した。こうした背景を踏まえ、青少年期のうちに適切な治療を行うことが急務であると考え、本研究の着想に至った。青少年期は PTSD に準じるような対人関係での傷つき体験が多いことを鑑み、対象範囲を拡大し、DSM-5 の A 基準閾値下を含めた PTSS を有する青少年も対象にした CPT（Cpt for Adolescent and Young Adult with Ptss; 以下、CAYAP）の開発に着手した。

２．研究の目的

本研究では、PTSD やトラウマ関連症状を有する青少年のケアや治療の向上を目的として 2 つの研究を行った。

（１）　情動コントロールや安全のための対処スキル等を含んだ青少年用 CPT（CAYAP）のマニュアル開発

（２）　単群の前後比較試験による青少年用 CPT（CAYAP）の実施可能性、安全性、有効性の検討

３．研究の方法

（１）青少年用 CPT（CAYAP）マニュアルの開発

概要：PTSD または PTSS を有する青少年向けに、既存の CPT の原版を青少年に即した分かりやすい言葉に修正し、情動コントロールや安全のための対処スキル等を加えた全 15 回のマニュアルを開発する。

手続き：CAYAP では青少年に対する CPT の治療効果を増強するために、以下の 8 つのアプローチを加える。1)自傷・他害・再被害への対応、2)解離症状への対応、3)安全になるための対処スキル学習、4)感情コントロール学習、5)安全な人間関係の学習、6)援助希求行動トレーニング、7)再発予防、そして、8)養育者セッションを並行して実施し、ソーシャルサポートによるドロップアウトの軽減を目指す。本人用と養育者用のワークブックを作成し、イラストや漫画を多用することで青少年や養育者が理解しやすいよう体裁の工夫を施す。

（２）青少年用 CPT（CAYAP）の単群の前後比較臨床試験

概要：PTSD または PTSS を有する青少年 15 例を対象に CAYAP を実施し、実施可能性、安全性、有効性を検討する。

実施場所：国立精神・神経医療研究センター病院、愛知県精神医療センター

デザイン：オープンラベル、対照群なしの単群、介入期間 18 週、前後比較試験

参加者：13 歳以上 25 歳以下で、DSM-5 による PTSD の診断を満たす、もしくは、A 基準が閾値下でも B 基準から H 基準を満たしている者（15 例）を対象とする。重度の物質使用障害、躁病エピソード、精神病性障害、著しい希死念慮が認められる者は除外する。

治療：CAYAP マニュアルに基づく治療を 18 週間の実施期間に週に 1 回、約 70 分の面接を 15 回実施する。セッション 1 でトラウマ反応に関する CAYAP の治療原理の説明や心理教育を行い、解離症状への対処法としてグラウンディングを練習し、治療への動機付けを高める。セッション 2 では、安全について理解し、安全になるための対処スキルを学ぶ。セッション 3 では、感情をコントロールし、安全な人間関係を理解し、助けの求め方を学習する。セッション 4～14 では、トラウマティックな出来事とその後の経過において、対象者が抱くようになった特定の認知（スタックポイント）が、PTSD 症状を作り、維持させているという概念化のもとに、スタックポイントの同定と修正を目指す。そして、最終セッションでは柔軟で安全な対人関係構築の練習を行い、再発予防について学ぶ。
評価：主要評価項目は、19 週時点での PTSD 臨床診断面接尺度(Clinician-Administered PTSD Scale for DSM-5; CAPS-5)で測定される心的外傷後ストレス症状とする。副次評価項目は、自覚的心的外傷後ストレス症状を測定する PCL-5 にて査定する。その他の評価項目として、精神疾患簡易構造化面接法（M.I.N.I.）、うつ症状の重症度（PHQ-9）、不安症状の重症度（GAD-7）、生活の質の程度（EQ-5D-5L）、機能障害の程度（SDS）、解離症状（CAPS-5、PCL-5 に追加した項目）、自殺念慮（SIDAS）、心的外傷後不適応的信念（PMBS）、トラウマ関連の自責感（TRGI）、感情制御尺度（DERS）、衝動性尺度（BIS-11）、青年期版愛着尺度（ECR-R-GSF）を用いて査定する。

４．研究成果

世界的な治療ガイドラインでは、成人の PTSD に対する第一治療選択として、トラウマに焦点を当てた CBT が、児童の PTSD にはトラウマフォーカスト CBT が推奨されている[4), 7)]。しかし、子どもから成人へと移行する発達時期に最適化した、青少年に特化したエビデンスに基づくトラウマ治療は申請者らの知る限り存在しない。青少年期は PTSD に準じるような対人関係での傷つき体験が多いことを鑑み、対象範囲を拡大し、米国精神医学会 DSM-5 の A 基準閾値下を含めた PTSS を有する青少年も対象にした青少年用 CPT（CAYAP）の開発を考えるに至った。青少年期は情動コントロールが困難で、安全感・安心感、援助希求行動に乏しく、自傷や逸脱行為のリスクが他の年齢層に比べ高いことから、CAYAP においては、既存の CPT に安全になるための対処スキルの学習、感情コントロール学習、安全な人間関係の理解、援助希求行動トレーニング、再発予防などを加え、さらに対象者が安心できる環境を構築するために養育者面接を並行して実施するプログラム構成にした。CPT の開発者であるデューク大学の Patricia Resick 教授や日本のトラウマ専門家等による会議を重ね、治療プログラムを細部まで整備し、イラストや漫画を多用することで患者、養育者、治療者にとって理解しやすいワークブックを作成した。

臨床試験の実施にあたっては、倫理審査委員会の承認を得て、UMIN CTR に登録を行った（UMIN000039341）。また、前後比較臨床試験に入る前に 3 例実施し、治療マニュアル、ワークブックの使用感や実施可能性、安全性、有効性について検討した。治療を終了した 3 例においては PTSD 症状、うつ症状の顕著な改善が認められ、重篤な有害事象は見られなかった。前後比較臨床試験の準備が整い、リクルートのための広報活動を行ったが、新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、対面によるセラピーが困難な状況となり、研究期間内に臨床試験を完遂できなかった。今後 CAYAP の有効性を検討するために、前後比較臨床試験を目標症例登録数まで継続する。

研究報告としては、青年期の性犯罪被害女性への CPT 実施事例について、2018 年に日本認知療法・認知行動療法学会で発表し、2021 年に『認知療法研究』にて論文を公表した。その他、青少年への CPT 実施事例を複数の学会で発表した。また、本人用と養育者用 CAYAP の治療内容については、2019 年に European Society for Traumatic Stress Studies Conference にて、臨床試験プロトコルについては、2020 年に International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions で発表した。

〈引用文献〉

1) 片柳章子：いじめや体罰が被害生徒に重篤な精神症状を呈する構造について，ストレスマネジメント研究，Vol. 12 No. 2，27-34, 2016.
2) 法務省：犯罪白書，2015.
3) Kessler RC et al: Posttraumatic stress disorder in the National Comorbidity Survey, Archives of General Psychiatry, 52(12), 1048-1060, 1995.
4) Bisson JI et al: Psychological therapies for chronic post-traumatic stress disorder (PTSD) in adults, Cochrane Database of Systematic Reviews, 13 (12), CD003388, 2013.
5) Watts BV et al: Meta-analysis of the efficacy of treatments for posttraumatic stress disorder, Journal of Clinical Psychiatry, 74(6), 541-550, 2013.
6) 伊藤正哉ら：心的外傷後ストレス障害に対する認知行動療法―犯罪被害者のトラウマ治療を中心に―，精神科治療学, 31(2), 221-225, 2016.
7) NICE guidelines: Psychological interventions for the prevention and treatment of PTSD in children and young people, 2015.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 片柳章子、中島聡美、伊藤正哉、蟹江絢子、堀越勝	４．巻 第14巻1号
２．論文標題 性暴力被害者への認知処理療法適用による心的外傷後ストレス障害の回復過程	５．発行年 2021年
３．雑誌名 認知療法研究	６．最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Oe Misari、Ito Masaya、Takebayashi Yoshitake、Katayanagi Akiko、Horikoshi Masaru	４．巻 11
２．論文標題 Prevalence and comorbidity of the ICD-11 and DSM-5 for PTSD caseness with previous diagnostic manuals among the Japanese population	５．発行年 2020年
３．雑誌名 European Journal of Psychotraumatology	６．最初と最後の頁 1753938～1753938
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/20008198.2020.1753938	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Chou Po-Han、Ito Masaya、Horikoshi Masaru	４．巻 129
２．論文標題 Associations between PTSD symptoms and suicide risk: A comparison of 4-factor and 7-factor models	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Psychiatric Research	６．最初と最後の頁 47～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jpsychires.2020.06.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Fujisato Hiroko、Ito Masaya、Berking Matthias、Horikoshi Masaru	４．巻 277
２．論文標題 The influence of emotion regulation on posttraumatic stress symptoms among Japanese people	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Affective Disorders	６．最初と最後の頁 577～583
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jad.2020.08.056	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Ito Masaya、Takebayashi Yoshitake、Suzuki Yuriko、Horikoshi Masaru	4．巻 247
2．論文標題 Posttraumatic stress disorder checklist for DSM-5: Psychometric properties in a Japanese population	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of Affective Disorders	6．最初と最後の頁 11～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jad.2018.12.086	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ito Masaya、Horikoshi Masaru、Resick Patricia A、Katayanagi Akiko、Miyamae Mitsuhiro、Takagishi Yuriko、Takebayashi Yoshitake、Kanie Ayako、Hirabayashi Naotsugu、Furukawa Toshiaki A	4．巻 7
2．論文標題 Study protocol for a randomised controlled trial of cognitive processing therapy for post-traumatic stress disorder among Japanese patients: the Safety, Power, Intimacy, Esteem, Trust (SPINET) study	5．発行年 2017年
3．雑誌名 BMJ Open	6．最初と最後の頁 e014292～e014292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1136/bmjopen-2016-014292	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　2件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Stephen W. Porge, Sue Carter, Takakazu Oka, Keisuke Kawai, Matsui Takemi, Masako Hosoi, Akiko Katayanagi, Tsutomu Kamei, Chieko Kato, Toshikazu Shinba, Keishin Kimura
2．発表標題 “Ancient Wisdom Meets Contemporary Neuroscience” & ” Love Overcomes Trauma Understanding Through Science : The Oxytocin Hypothesis.”
3．学会等名 第19回 日本ヨーガ療法学会沖縄大会ウェブ開催（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 片柳章子
2．発表標題 心的外傷後ストレス障害への認知行動療法
3．学会等名 第19回 日本ヨーガ療法学会沖縄大会ウェブ開催（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 Akiko Katayanagi, Kiyoshi Makita, Misari Oe, Masaya Ito, Akiko Kikuchi, Satomi Nakajima, Takako Konishi, Masaru Horikoshi
２．発表標題 Development of a Cognitive Processing Therapy Program for Adolescents and Young Adults.
３．学会等名 24th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kiyoshi Makita, Akiko Katayanagi, Misari Oe, Masaya Ito, Akiko Kikuchi, Satomi Nakajima, Takako Konishi, Masaru Horikoshi
２．発表標題 Development of Optional program for Caregiver of Adolescents undergoing Cognitive Processing Therapy.
３．学会等名 24th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Aiichiro Nakajima, Ayako Kanie, Masaya Ito, Chika Kubota, Chika Yokoyama, Miyuki Makino, Akiko Katayanagi, Masaru Horikoshi
２．発表標題 Development of a psychoeducational website to prevent perinatal mental problems for new-parents.
３．学会等名 24th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 牧田潔，片柳章子，大江美佐里，菊池安希子，伊藤正哉，中島聡美，小西聖子，堀越勝
２．発表標題 心的外傷後ストレス症状を呈した青少年を対象とした青少年版認知処理療法の開発
３．学会等名 第20回日本認知療法・認知行動療法学会ウェブ開催
４．発表年 2020年

１．発表者名 片柳章子，牧田潔，大江美佐里，菊池安希子，伊藤正哉，蟹江絢子，佐藤珠恵，中島聡美，小西聖子，堀越勝
２．発表標題 心的外傷後ストレス症状の青少年を対象にした日本版認知処理療法の開発
３．学会等名 第19回日本トラウマティック・ストレス学会ウェブ開催
４．発表年 2020年

１．発表者名 佐藤珠恵，片柳章子，牧野みゆき，田中敏志，伊藤正哉，堀越勝
２．発表標題 認知処理療法（CPT）のランダム化比較試験における臨床研究コーディネーター（CRC）の役割
３．学会等名 第19回日本トラウマティック・ストレス学会ウェブ開催
４．発表年 2020年

１．発表者名 Akiko Katayanagi, Kiyoshi Makita, Masaya Ito, Ayako Kanie, Akiko Kikuchi, Masaru Horikoshi
２．発表標題 Developing a Japanese Version of Cognitive Processing Therapy for Adolescents and Young Adults with Post-Traumatic Stress Symptoms
３．学会等名 The 16th European Society for Traumatic Stress Studies Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kiyoshi Makita, Akiko Katayanagi, Masaya Ito, Ayako Kanie, Akiko Kikuchi, Masaru Horikoshi
２．発表標題 Development of cognitive processing therapy programs for caregivers of young people with post-traumatic stress symptoms in a Japanese context
３．学会等名 The 16th European Society for Traumatic Stress Studies Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 片柳章子，牧田潔，伊藤正哉 ，蟹江絢子，菊池安希子，佐藤珠恵，堀越勝
２．発表標題 認知処理療法中に再度性被害に遭ったPTSD患者の事例報告
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 片柳章子
２．発表標題 心的外傷後ストレス障害に対する認知処理療法の日本における実践
３．学会等名 第17回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高岸百合子，伊藤正哉，片柳章子，森田展彰，堀越勝
２．発表標題 個人版認知処理療法の実施可能性と有効性
３．学会等名 第17回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 片柳章子，蟹江絢子，伊藤正哉，中島聡美，堀越勝
２．発表標題 青少年期のPTSD患者に対する精神療法の課題と意義
３．学会等名 第17回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 正木智子，今野理恵子，牧野みゆき，市丸佳代，小西聖子
２．発表標題 日本における集団版CPT，集団版CPT-Cの取り組み
３．学会等名 第17回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤珠恵，伊藤正哉，牧野みゆき，片柳章子，堀越勝，小西聖子
２．発表標題 心的外傷後ストレス障害患者における否定的な認知の特徴：トラウマ体験の種類による検討
３．学会等名 第17回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 片柳章子・中島聡美・伊藤正哉・堀越勝
２．発表標題 心的外傷後ストレス障害とパニック発作の症状を呈する性暴力被害女性に対する認知処理療法の事例報告
３．学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuriko Takagishi, Satoshi Tanaka, Masaya Ito, Masaru Horikoshi
２．発表標題 Application of CPT to SUD experienced trauma in Japan.
３．学会等名 19th Congress of International Society for Biomedical Research on Alcoholism（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 片柳章子
２．発表標題 被害者のトラウマの特性に応じた臨床心理学的支援
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 片柳章子，伊藤正哉，堀越勝
２．発表標題 心的外傷体験後、遷延表出した怒りに関する介入-性暴力被害に遭った二事例の認知処理療法課程を通して-
３．学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 今野理恵子，小西聖子
２．発表標題 日本における集団版認知処理療法の取り組み
３．学会等名 第16回トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 片柳章子，中島聡美，金原さと子	４．発行年 2021年
２．出版社 遠見書房	５．総ページ数 224
３．書名 「災害被災者の心理と支援」，公認心理師の基礎と実践　第16 巻　健康・医療心理学	

1．著者名 片柳章子（部分執筆），永光信一郎 監修	4．発行年 2020年
2．出版社 学校法人 久留米大学	5．総ページ数 104
3．書名 親子の心の診療に関する多職種連携マニュアル	

1．著者名 片柳章子（部分執筆），永光信一郎 監修	4．発行年 2020年
2．出版社 学校法人 久留米大学	5．総ページ数 114
3．書名 産婦人科医、小児科医、精神科医、心療内科医のための親子の心の診療マップ	

1．著者名 伊藤正哉，片柳章子　日本認知・行動療法学会編	4．発行年 2019年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 828
3．書名 第5章 介入技法「PTSDに対する多様なアプローチ」	

1．著者名 P.A．リーシック，C.M．マンソン，K.M．チャード 著，伊藤正哉・堀越勝 監修，高岸百合子・蟹江絢子 監訳，今村扶実・片柳章子・菊池安希子・今野理恵子・佐藤珠江・田中敏志・前田佳宏・牧田潔・牧野みゆき・正木智子・松田陽子・宮前光宏・山口慶子・横山知加 部分監訳	4．発行年 2019年
2．出版社 創元社	5．総ページ数 281
3．書名 トラウマへの認知処理療法　治療者のための包括手引き	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	堀越　勝 (HORIKOSHI Masaru) (60344850)	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・センター長 (82611)	
研究分担者	中島　聡美 (NAKAJIMA Satomi) (20285753)	武蔵野大学・人間科学部・教授 (32680)	
研究分担者	小西　聖子 (KONISHI Takako) (30251557)	武蔵野大学・人間科学部・教授 (32680)	
研究分担者	牧田　潔 (MAKITA Kiyoshi) (00455560)	愛知学院大学・心身科学部・准教授 (33902)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	伊藤　正哉 (ITO Masaya)		
研究協力者	菊池　安希子 (KIKUCHI Akiko)		
研究協力者	大江　美佐里 (OE Misari)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	蟹江　絢子 (KANIE Ayako)		
研究協力者	堀　未来 (HORI Miki)		
研究協力者	中嶋　愛一郎 (NAKAJIMA Aiichirou)		
研究協力者	佐藤　珠恵 (SATO Tamae)		
研究協力者	牧野　みゆき (MAKINO Miyuki)		
研究協力者	高岸　百合子 (TAKAGISHI Yuriko)		
研究協力者	田中　敏志 (TANAKA Satoshi)		
研究協力者	松田　陽子 (MATSUDA Youko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山口　慶子 (YAMAGUCHI Keiko)		
研究協力者	横山　千加 (YOKOYAMA Chika)		
研究協力者	リーシック　パトリシア (RESICK Patricia A.)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関